



世界初の難脱粒性・難穂発芽性を併せ持つソバ新品種「はるかみどり」 — 関東以南でのソバの安定生産に貢献 —

暖地水田輪作研究領域

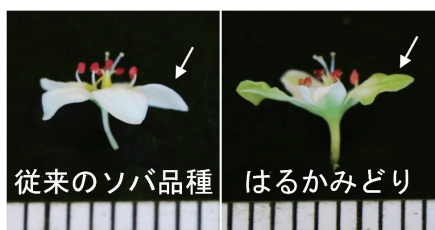
鈴木 達郎（すずき たつろう）

研究の背景

ソバは、夏に播種する夏まき栽培が主流ですが、イネ等の主要穀物と比べて脱粒しやすく、収穫時期が台風と重なることから、脱粒による収量の低下が問題となります。一方、初夏に新ソバを提供できる春まき栽培は、台風を回避しやすい作型となるものの、収穫時期が梅雨と重なるため収穫前に子実が発芽してしまう穂発芽が課題となります。また、穂発芽は、収量が減るだけでなく、麺が切れやすくなる等の品質低下の原因にもなります。さらに、春まきと夏まきの両作型を行う2期作の産地では、それぞれの作型に適した異なる品種を栽培することが多いため異品種混入が起きやすく、両作型に適性のある品種の開発が望まれてきました。そこで、関東以南で春まき・夏まきの両作型が可能（2期作が可能）な、世界初の難脱粒性・難穂発芽性を併せ持つ品種「はるかみどり」を育成しました。

育成の経緯と品種名の由来

難穂発芽性の晩生系統「九系29」と難脱粒性の早生系統「芽系34」との交配後代系統と、難穂発芽性の中生系統「九系28」との交配から育成し、2025年6月に出願公表（第37873号）されました。品種名は、春まき栽培と夏まき栽培の両作型が可能であること（春夏＝はるか）と、難脱粒性の導入により花弁がガク化して花が淡い緑色（図1）であることから、「はるかみどり」と命名しました。

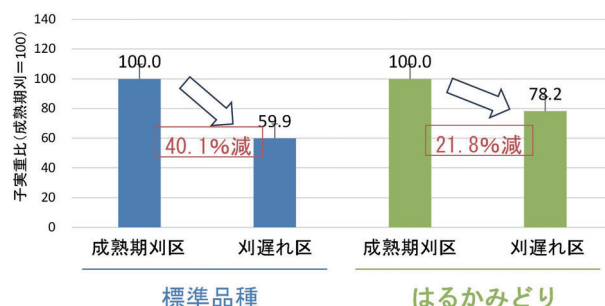


* 目盛りは1mm

◀ 図1 「はるかみどり」の花の写真
花弁が「ガク化」する突然変異（右写真の矢印）により、花は淡い緑色である

新品種「はるかみどり」の特徴

「はるかみどり」は、関東の主力品種である「常陸秋そば」と比較して収量が多く、刈遅れを想定したコンバイン収穫試験では、脱粒が少なく収量の低下程度が小さいことがわかりました（図2）。花びらがガク化する突然変異により種子と植物をつなぐ細いヒモのような部分が太くなるため難脱粒性が発揮されます。また、難穂発芽性を持つことから春まき栽培も可能です。製粉・製麺実需者による品質評価では、「常陸秋そば」と同等以上の評価を得ています。



▲ 図2 「はるかみどり」のコンバイン刈遅れ収穫試験における子実重の比較（意図的な刈遅れ試験）

4 作期平均（2023 年夏まき、2024 年春まき・夏まき、2025 年春まき）

育成地である熊本県合志市において刈遅れを想定したコンバイン収穫試験を実施。標準品種は春まき栽培では「NARO-FE-1」、夏まき栽培では「常陸秋そば」とした。「成熟期」（種子の8割が黒化した時期＝成熟期刈区）および「成熟期の2週間後」（＝刈遅れ区）にコンバイン収穫を行い、成熟期区の単収を100とした場合の刈遅れ区の減収割合を示す。「はるかみどり」は標準品種と比べて減収割合が少ない。

今後の普及見込み

2025年の夏まき栽培から、関東～九州のソバ産地で栽培が始まっています。九州では熊本県、福岡県、鹿児島県で栽培されています。「はるかみどり」の普及が国産ソバの安定生産と振興につながることを期待します。



◀ 「はるかみどり」のプレスリリース記事はこちら